

10年後を思い浮かべられる仕事場に。

——日本語リテラシーチューターの3年使い捨て反対。

ボニーとクライド¹がすてきだと思っていた十代も遠くなり、精華大学の日本語リテラシー教育部門でチューター（嘱託助手）として働き始めて2年。なんとなく10年後、少なくとも次の春を思い浮かべながらしごとがしたい。学生と近いところで話をするしごとだから、その学生たちが卒論を書くときもちゃんとここにいて相談にのったりできたらいいなあ。しかし、そんな夢をすることも、どこかはかない。なぜならチューターは3年で雇い止めになることが決まっていて、1回生で会った学生が4回生になるころには、精華にいたることができないから。

はじめて 読んでくれているひと、こんにちは。知っているひと、こんにちは。わたし（たち）は、それぞれ精華の色んな時期の卒業生で、日本語リテラシー教育部門でチューターとして働いています。日本語リテラシーは芸術のひとには縁がないかもしれないけど、人文の一回生全員を対象にした週二回（講義+実習）の、人文にしては密度の濃い授業です。その授業カリキュラムからオフィスの蔵書管理まで担っているのが、日本語リテラシー教育部門で、いまは4名の講師と8名のチューターが働いています。短大時代から数えると数十年の歴史のある精華のなかでも、21世紀になってからできた比較的新しい部門で、そのわりにはホームページで初年次教育の柱のひとつとして紹介されていたり、『大学基準適合認定証』（2008年度）では「徹底した文章指導のもとで文章作成をさせる導入教育として～大きな効果を上げている」と書かれていたり、それなりに評判はよいらしい。そのなかで、わたし（たち）

チューターのしごとは、作文の添削をしたり、学生と面談したり、講義を担当する講師のアシスタントをしたり、補講をしたり——と多岐にわたっていて、アシスタント（補助）というよりも、講師のひとたちと一緒に授業を組み立てているという感

じすらする。それだけ忙しく働いているからには、今後の授業の内容を充実させていったり、職場の環境を整備したり、長期的な観点から学生が利用しやすいオフィスをつくっていきたいという思いはどうせんでくるのだけど——。

現実は 作文の添削や学生とはなしをするリズムをつかむのに必死になっているうちに最初の1年は過ぎていき、だいたいのしごとは覚えてかなって2年目が終わると、もう次の職場を探さないといけない。しかも教育ってしごとがら、学期途中ではなかなかやめづらいから、ほかに中途採用があっても受けることも難しい。それもこれも、チューターは1年契約で2回以上の更新ができない（つまり3年目で自動的に雇い止め）、と決まっているから。チューターのしごとは臨時的なものでもないのに、期限付きの契約で、期限が切れたらさようなら、また新しいひとにゼロからしごとを覚えてもらいますってことを繰り返しているのです。まるで消費期限の切れたシーチキン捨てて、新しい缶を買ってくるみたいに（というかまだ期限切れてないんですけど）。チューターは一回生ひとりひとりと時間をかけてかかわってきた教員で、その経験にしても、つくってきた人間関係にしてもそんな簡単に取り替えがきくものではないのに。ちなみにそれは日本語リテラシーだけの問題ではなくて、いまの精華にはわたし（たち）と同じような嘱託教職員や派遣職員がたくさんいて、やっぱり期限切れ食品よろしく精華から追い出され続けている。専任教職員のひとたちと、同じ大学で、同じように学生と接しているのに、精華の未来を思い描くことから疎外され、将来ここにいることを期待されてもいない。ほんとうは一緒に精華をつくっていくはずのひとたちをつぎつぎに切り捨て続けている精華の現状はどこかおかしいと思う。そういう自分たちのいまいる場所の矛盾や不公正を放置したまま教育なんてできないよっとも思う。



Tove Jansson
Illustration

¹ アメリカ映画『俺たちに明日はない』（1967）にてくる主人公たち。60年代後半の刹那的な生の代名詞。ちなみに真島昌利の歌『こんなもんじゃあない』の歌いだしは「今夜ボニーとクライドが僕の部屋へやってくる」。



とにかく もしこのままいくと、この春には2人、来春には4人が雇い止めになって、2011年春にはいまいるチューターはひとりしか残っていない計算になる（そしてだれもいなくなった?）²。短期間で引き継ぎを繰り返せば、当然伝えられる情報量は落ちるし、だいたい熟練したひとをやめさせて、新しいひとを雇う意味がわからない。それに学生ひとりひとりの話をしっかりきくようにデザインされた職場なのに、つねに自分たちがいなくなることを考えながら働き続けなければいけないのは、どこか気持ちが引き裂かれている感じがする。そんな状況をなんとかするために、昨年10月から何回か大学の経営を担っている理事のひとたちと話し合いをもち、12月22日には団体交渉の場で専務理事の上々手さんに雇い止めの廃止を求める要望書を出しました。

話あいのなかで 上々手専務理事は「授業をアシストするチューターの能力が1年2年と上がっていくかもしれないけれど、それは制度として求めるものではない」と言い、さらにはっきりと「大学のカリキュラムの考え方が変わることがもし将来的に訪れた場合に、

（更新制限なしで5年10年と1年契約を繰り返すやりかたでは）雇用としては対応出来ない」³とも言い、「制度を維持していくと、色んなデメリットが出てくるのはしかたがない」とも言いました。つまり、チューターは補助的な役割をはたす存在としてしか制度上では考えられていなくて（それは学生とふかくかかわることを求められる現場の状況をまったく無視していますが）、教育者としての成長もとくに期待されておらず、経験の断絶やモチベーションの低下という少々のデメリットはしょうがない、ということでしょうか。将来がみえないこと、そういう不安を抱くのは、チューターも人間なのであたりまえで、それが無視してもよいような「デメリット」という言葉で表現されてしまうところに、しゅん、という思いをいだくのと同時に、なんか人間扱いされていないという

² つまり3年たったらいやでも去らなければいけないのに、部門のしごとの継続を考えるなら、3年間のあいだはやめることにもプレッシャーがかかるってひどい状況なのです。

³ まるで官僚答弁ですが、整理すると、短期の有期契約（この場合は1年）でも合計で3年以上繰り返すと、雇われている側に継続して雇用されることへの期待権が生まれるっていう判例がある＝それ以後は雇い止めではなくて、解雇になるので、やめさせたくてもやめさせにくいってなしかと。



強い憤りも感じます。どちらにしても、精華創立の理念である「人間を尊重し、人間を大切にする」（創立者の岡本清一さんの言葉）というところからは、相当離れたところにいまの精華の経営はあるみたいです。それでも、話さないことにはどうしようもないので今後も話し合いは継続していきます。興味あるひとはぜひ一緒にきて、どんな発想のもとに精華がいま動いているのかみてみてください。応援歓迎、冷やかさもそれなりに歓迎。

さいごに 学生バイトのひとも、専任のひとも、派遣のひとも、学生のひとも、わたし（たち）と同じ囑託のひとも、できたら関心をもって、職場で、帰り道で、ラウンジで、それぞれの生活の場所で、この話をしてほしいです。ニュースで出て

くる派遣村も、社会学者の阿部真大がバイク便ライダーについて書いた『搾取される若者たち』も、どこか遠くのはなしじゃなくて、いまここで起こっていること。もしだれもこのことに関心を持たないなら、この春にもわたし（たち）の大事な同僚が失業してしまう。来年の春には、この文を書いているわたし（たち）も、失業してい

るはず。精華でつくった人間関係も、作文を添削する技術も、この先とくにいかすあてもなく。それではいやなので、署名をつくりました。悠々館階段途中、明窓館102教室前などに署名用紙入れを設置していますので、3年雇い止め反対という趣旨に賛同するひとはぜひ名前を書いてください。

『俺たちに明日はない』って燃え尽きるんじゃないかって、だれもが、明日も、しあさっての生活も思い浮かべることのできる精華になることを、わたし（たち）は夢んでいます。

ここまで読んでくれたひと、ありがとう。また次のピラで会いましょう。（7th Jan 2010）

文を書いたひと：山家悠平（チューター）

発行：京都精華大学囑託教職員組合 SocoSoco

☆SocoSocoは2009年末に、日本語リテラシーチューターの雇い止め問題をきっかけに結成された組合。このピラの趣旨に賛同するひとなら、わたし（たち）と同じ囑託教職員はもちろん、派遣職員のみでも、学生バイトのみでも、だれでも加入できます。しごとの合間にできる範囲で活動するという方針なので、とてもたよりないですがそれでも情報を共有したりすることはできるので、それぞれの職場で問題をひとりがかかえているひとがいたら ledupart@kyoto-seika.ac.jp まで気軽に連絡を。

